

若者へのメッセージ 56

下掛宝生流能楽師 安田 登

【第一回】書之力

「書」は、ただ上手に文字を書くための技術ではない。それは古人とつながるための技術であり、だからこそ古来、特に重視されてきた。今回は連載にあり、「書」とは何かということから考えてみたいと思う。私は能楽師なので適当なことを書くかもしれないがどうぞご容赦を。

「書」は貴族や武士の教養の一つだった

かつて日本では、貴族や武士は「六芸^{りくげい}」を学びました。「書」は、その六芸の中のひとつに入っています。

六芸は古代中国の士階級以上の者が学んだ教養課程の科目をいいます。西洋でいえばリベラルアーツに相当し、次の六つをいいます。

礼：冠礼、婚礼、喪礼などの通過儀礼

楽：音楽や舞などの理論や演奏・上演

射：弓を射る技術

御：馬車を操る技術

書：書や文学

数：算術

これら六つに共通することは、ふつうならばコミュニケーションが取れない「絶対他者」と関係を構築したり、あるいはコントロールしたりするためのツールであるということです。

書は「机上の学問」なのか

「礼（禮）」は、もとは神霊とコミュニケーションを取るためのものでした。

安田 登（やすだ・のぼる）

能楽師（ワキ方下掛宝生流）。全国各地の能の舞台出演や海外での公演にも出演する。また、神話『イナナノ冥界下り（シュメール語）』でのヨーロッパ公演や、金沢21世紀美術館の委嘱依頼による『天守物語（泉鏡花）』の上演、島根の神楽を取り入れた『芸能開闢古事記』など、能・音楽・朗読を融合させた舞台を数多く創作、出演する。NHK・Eテレ 10分de名著『平家物語』、『太平記』、『ウェイリー版・源氏物語』講師・朗読。

著書：『野の古典（紀伊國屋書店）』、『身体感覚で『論語』を読みなおす。』、『能 550年続いた仕掛けとは』（以上新潮社）、『あわいの力「心の時代」の次を生きる』、『イナナノ冥界下り』、『三流のすすめ』（ともにミシマ社）など多数。



「楽」も、もとは神霊とのコミュニケーションツールでした。しかも、それは強力な武器にもなり得ました。そこにいない存在を音だけでコントロールできる、それが「楽」です。

「射」がコントロールするのは距離と時間です。距離的にも時間的にも「いま、ここ」にない存在に届かせる方法が射です。

「御」は、言葉が通じない動物を意のままに操る方法です。

最後の「書」と「数」は机上の学問のように思われがちです。

しかし、「数」がコンピュータを生み、そして現代の生成AI（人工知能）まで生み出したことを考えると、単に「読み書き算盤」ではないことは明らかでしょう。

神懸かりの書

そして「書」は「古人とつながる」ツールでした。

空海の書、藤原定家の書、緒遂良の書などを臨書していると、古人の筆遣いを感じたという方も多いのではないのでしょうか。

中国の西安には、たくさんの石碑や金石文、石彫刻などが収蔵される碑林（西安碑林博物館）というところがあります。隷書を学ぶ人ならば最初に臨書する後漢の「曹全碑」もありま

唐代のものとしては、歐陽詢の「皇甫誕碑」、虞世南の「孔子廟堂碑」、そして顔真卿の「顔氏家廟碑」など名品揃いです。

顔真卿の石碑を眺めていたときに、大学で書학을学んでいるというひとりの女性に声をかけられました。

「この碑は彼の友人が刻んだもの。だから、顔真卿の筆遣いがそのまま残っている。手で触れてみてください」

そうと言われて指で石碑をなぞると、顔真卿の筆圧、息遣いまでもが感じられるような気持ちになりました。そして、突然、顔真卿が孔子の弟子、顔回の末裔だということを思い出したのです。

顔回は、孔子が「私も彼に及ばない」といった高弟です。彼が若くして亡くなったとき、孔子は「ああ、天は私を滅ぼそうとするのか（噫、天、我を喪せり）」と嘆いたほどの高弟でした。

孔子や顔回の属する儒家は、本来は雨乞いをする呪術師集団だったのではといわれています。

儒家の第一の經典は『論語』です。その巻頭に「学びて時にこれを習う、亦説（またよろこ）ばしからずや」という文があります。江戸時代の儒者、伊藤仁斎はこの章句を「小論語」と呼び、これさえわかれば『論語』全体がわかるとまでいいました。

ここに「説（悦）」という文字が現れます。この字の右の「兌」の字は、巫祝を表わす「兄」の頭上に神気が漂っている形です。巫祝が神霊に憑依（ひょうい）され脱我、忘我の状態になっていることを表す文字です。神懸かりの姿です。『古事記』の中にはアメノウズメ命が神懸かりしたと書かれますし、私のしている能もその流れを継いでいます。

儒家の人たちもその能力を磨く訓練をした。それが『論語』の「学び」だった。孔子や顔回は特にその能力に優れていたし、そして顔回の子孫である顔真卿もそうだったのではないのでしょうか。

顔真卿の書風が、とてもひとりの人の書とは思えないほどに多様性があることに驚きます。それは彼の書が「兌」、すなわち何かに憑依された神懸かりの書だったからかもしれません。

「書」が、「古人とつながる」ツールだというのはそのようなわけです。

孔子は琴を学んだときに、古代の聖王、文王を幻視しました。顔真卿の書からも、文王や周公などの古代の聖人たちの筆遣いや息遣いを感じることができるともしれません。

いにしえの書家とつながる、そんなつもりで臨書してみてください。